

報 告

# 廣池千九郎著『道徳科学の論文』 英語版刊行にいたるまで\*

谷 口 茂

廣池千九郎博士が『論文』の英訳の決意を初めて記録に残されたのは大正11年（1922）10月29日のことであり、東京外国語学校（東京外国語大学の前身）の大岩元三郎教授が依頼を受けて翻訳に着手したのが大正15年8月のことであった。廣池博士はこの事業に大きな期待をかけ、大岩教授はこれに応えるべく努力を傾注したが、結局大岩教授が訳を完成させた部分は第一章、二章、十章および十四章の1～5項にとどまり、昭和10年には廣池博士は大岩教授への期待を断念せざるを得ない状況となり、英訳計画は頓挫したままになった<sup>1)</sup>。

新たな英訳計画が具体的に浮上したのは昭和46年（1971）、横浜の本牧から千葉県富津にむけての東京湾を横切るフェリーボートの甲板上でのことであった。藤村義朗ジュピター・コーポレーション社長が宗武志、大塚善治郎麗澤大学教授（以上いずれも故人）、長谷川浩二モラロジー研究所開発部長を富津の別荘に招待され、フェリーボートを使ってのご案内の折、晴天に恵まれた爽快な潮風のなかで、『論文』英訳に話題が及んだのであった。ご相伴に与ってご一緒させていただいていた私が、数日後高畑太一総務部長（故人）にこの件を報告、同年6月4日付で『論文』英訳準備委員会の発足となった。メンバーは下記の通りである。

---

\*本報告書は、英語版が刊行された平成14年（2002）に作成されていたが、今回そのまま掲載の運びとなったものである。

## 『論文』英訳準備委員会

委員長 宗武志

委員 大塚善治郎、割石虎雄、高畑太一、谷口茂、川窪啓資、田中駿平

翻訳者 上記の委員、上田茂雄、宮島達郎、小泉喜平、矢野重治、森正晶

計画としては翻訳を第一期（自序文、緒言、第一、二、十四、十五章）と第二期（残り全部）に分け、第一期の完了見込みは昭和48年9月30日とされ、第二期の完了は早ければ昭和53年と予定された<sup>2)</sup>。

作業の進め方は各委員が担当部分の第一翻訳原稿を委員長に提出し、委員長が校閲をしたものを田中宏子さんがタイプし、G. バントック氏がそれに目を通し、委員長との間で確認した後に田中宏子さんが再度タイプで清書して提出、原稿が完了するという運びであった。第一翻訳者の作業は難航し、しかも、その苦心の作が委員長の校閲で赤く染まる、といった調子であったが、第一期の第一翻訳者の仕事が、ほぼ終了したのが昭和51年であった。昭和56年春には第二期の部分も出揃い、第一翻訳者の仕事は終了した。この間、委員長は次々と校閲を続行しながら、自ら第一翻訳も担当した。特に第一翻訳者にとって重荷の部分は委員長が引き受けられ、第一翻訳のすべてを終了することができたのである<sup>3)</sup>。

委員長の校閲は第一翻訳原稿が提出され次第進められていたが、集中的な校閲は昭和52～55年にわたって行なわれ、56年春には全部を終了していた。バントック氏の校閲は昭和50年から始まり、56年には校閲を終えた。

この時点で翻訳を要する著者廣池博士の文章と和漢書からの引用文の英訳が終了した。独語の文献もその一部が割石委員によって英訳された。つづいて委員長の発案のもとに、昭和55年頃「編集チーム」が発足することになり、メンバーは宗委員長、川窪、田中、谷口で構成

された。目的は表現、スタイルなどの統一、引用文の整備を含めた総合的な点検であった。十四章から始めたが、まもなく序文より完全原稿を固めるべく方針を転換、編集チームが見終えたものを田中宏子さんがタイプで清書し、それを田中委員が確認してファイルするという作業が続けられ、十二章6項まで整理された。この経過のなかで、中道、中山両君の参加を要請し、討論と作業に若手の活力を提供していただいた。しかし、この作業は三年弱ほどで中断を余儀なくされた。昭和57年には「モラロジー概説翻訳委員会」が発足し、川窪委員はその責任者として重責を担うこととなり、田中委員は麗澤大学イギリス語学科の主任の立場にあり、谷口は学生部長の職にあつて、共同作業が難しくなったのである。

昭和60年4月まさに青天の霹靂で、宗委員長が忽然と去られた。先生が残されたお仕事は、「論文英訳準備委員会」としての使命を充分に果されたものであった。今日の英語版の刊行はこの宗委員長稿あつて初めて可能となったものである。

宗委員長の後を継ぐことになった私の仕事は、とはいっても公式に認められたものではなく、自分でそう受け止めただけのことであったのだが、中断したままになった編集チームの仕事を引き継いで、いつの日にか来るに違いない出版にむけての完全原稿を作成することであった。そのために、残された原稿の点検とともに、おびただしい数の引用文献を正確に記述するためと、加えて、手許に引用書の実物が無い引用文の収集のための文献調査を開始することとした。これは学究としての著者の態度が表われるところであり、徹底した調査によって正確を期した。昭和60年からこの作業に取りかかったが、63年より平成3年まで当時大学院生だった犬飼孝夫氏が調査を担当してくれて、私は完全原稿作成に時間を使うことができた。この調査は望月幸義編『廣池博士記念文庫洋書分類目録』（モラロジー研究所研究部、1975. 3. 10）に大いに助けられたが、記載されていない情報の補足のため、さらには廣池博士記念文庫および麗澤大学図書館に見当らない文

献の調査のために、国会図書館、東京大学図書館、筑波大学図書館、加えて海外では British Museum Library, Library of Congress, University of Washington の Suzzallo Library, および St. Martin's College Library のお世話になった。また当時ワシントン DC に駐在していた堀内一史氏にも多大な協力をいただいた。その他、麗大の日影尚之氏、ボストン滞在の麗大卒業生鳥生英二氏などの助力があった。特に古い和書漢籍に関しては研究部の欠端實氏に多大な支援と助力をいただいた。また麗大図書館司書友永由美子さんの調査に負うところも大きく、山田玲子さんにも調査いただいた。

引用文の収集に関しても、モラロジー研究所研究部に負うところが大きい。当初、その存在に全く気づいていなかったのであるが、研究部の細川幹夫氏が責任者となって40冊におよぶ引用文（収集）のファイルを用意してくれていたのである。にもかかわらず引用文の蒐集が必要なものがあり、当時英国に留学中であった廣池幹堂氏が British Museum Library で文献の調査に当たって下さった。また、海外出張中に時間をさいてくれた川窪委員、ワシントン DC 駐在の堀内一史氏などに多大の協力をいただいた。この文献調査は後半、散発的なものになったが、それでも英語版刊行の直前まで続いた<sup>4)</sup>。

昭和61年（1986）になって、『道徳科学の論文』の新版が出版され、それまで旧版を原本としていたこの翻訳事業も見直しを迫られることとなったが、この時も研究部からの変更箇所を示す資料の提供が助けられた。

このような動きのなかで、昭和63年（1988）に廣池千九郎博士没後50年を迎えた。この記念事業として初めて『論文』英語版の刊行が正式に打ち出され、翌平成元年（1989）には次のような委員会の発表が行われた。

『論文』英語版刊行委員会<sup>5)</sup>

委員長 谷口茂

副委員長	ギャビン・バントック
委員	川窪啓資
	田中駿平
	中道嘉彦
	中山理
	森正晶
書記	梅田徹

委員会は「刊行」を目標として、出版する書物の版のサイズ、活字の選定、書名などを決定。まず谷口がタイプセットに出す完全原稿を作成し、初校ゲラ以降で各委員が点検などに参加する、という段取りで作業を始めることになった。

刊行を明確に目標とする完全原稿を作成するためには、次の項目の作業や見直しが必要であった。先に述べたところと重複するが、列挙すると次のようになる。

1. 引用や各種の注などを含めてスタイルの確定と統一
2. 引用文献の調査
3. 『論文』の旧版から新版への転換
4. ドイツ語、フランス語文献など、未訳のままになっている引用文の英訳
5. 中国語のローマ字表記について、従来のウェード式からピンイン表記への転換
6. 「宗委員長稿」に残された懸案事項

非英語文献の翻訳は三省堂仲介の翻訳会社に依頼したものを森委員と谷口が点検して採用した。

ウェード式からピンインへの転換の是非については、麗大中国語学科の松田和夫、武信彰両氏の助言をいただいた。転換作業は一部を武信氏紹介の業者をお願いしたが、大部分は当委員会の事務担当者であった山田玲子さんが成し遂げたものである。

完全原稿を作成する過程で多くの方々の貴重な時間と助言をいただ

いた。

テキストの解釈に関して私が問題にぶつかるたびに相談に乗ってくれた人を思うと、故浅野栄一郎氏、研究部の望月幸義、欠端實、井出元、立木教夫、岩佐信道の諸氏の顔が浮かぶ。

中国の古典に関してはモラロジー研究所発行の『「道徳科学の論文」漢籍の手引き』を参考とさせていただいた。特に入り組んだ問題に関しては欠端、井出の両氏に指導を仰いだ。

日本の古典に関しては浅野栄一郎氏の亡きあと、池田裕氏の助言をいただいた。

仏教に関する項は、サンスクリット、パーリー語の表記も含めて研究部の竹内啓二氏に点検をいただいた。

ドイツ語に関する問題は落合亮一、奥野保明両氏にご教示いただいた。

さて完全原稿の作成は、「宗委員長稿」の変更点を G. バントック副委員長と再検討する形で進められたが、的確な訳語を模索するとき、また微妙な含みを残すときバントック氏の洞察と文才に負うところが多かった。辛抱強く最後まで協力を惜しまなかったバントック氏にとっても、この事業は彼の情熱を傾注したライフワークだったのである。昭和50年から56年までの校閲作業、昭和61年からの編集チーム作成のファイルの見直し、まもなく私との協同作業と、通算して20年余は、この事業の中核で関わってきた。発刊に際しての装丁もまた彼の才能に負うものであった。

モリ&アソシエーツ（英文電算写植会社）に完全原稿の一部を出稿することができたのは平成3年（1991）10月に入ってからであった。恐縮ながら、前後の私の事情は、新委員会発足の翌年平成2年3月に胆石の摘出手術を受け、4月にはモラロジー研究所の国際部長の職を拝命し、翌3年にはブラジルに出張し、米国モラロジー協会の理事長の職を兼ね、また麗澤大学の新学部増設の準備に参画する立場になる

という、動きの多い時期だった。平成4年の春に第一章から六章までの念願の初校ゲラが Mori & Associates から送られてきた。これ以降、完全原稿の作成と各章のゲラの推敲が錯綜することになるが、この流れを把握し、捌いてくれる司令塔が、平成元年から書記に就任した山田玲子さんであった。彼女の残した「論文英訳刊行作業経過一覧表」は10年間にわたったこの経過を正確に書き留めている。

初校ゲラの校正は原則として第一訳の担当者に受け持ってもらうこととし、担当者のいない部分は他の委員が代行した。こうして川窪、田中、中道、中山、森、梅田の各委員、および矢野前委員が校正に当り、加えて当時国際経済学部講師のカール・オーガス氏も一部点検に加わってくれた。

この頃は麗澤大学は拡充期にあり、各委員が多忙を極めるといった状況の中にあつた。そのようなとき、平成6年になって私共の委員会に強力な助っ人が現れた。前委員会の翻訳担当者だった宮島達郎氏が協力を申し出てくださったのである（平成11年以降、本委員会顧問）。以後校を重ねていくゲラの多くが同顧問の精密な校正を受けていくことになった。

谷口の完全原稿を写植会社に出稿する作業が難渋し、このプロジェクトの進捗を阻んでいた。十二章以降には特別の難しさが加わり、脚注にも試行錯誤を繰り返すありさまで、待機している委員各位に多大の迷惑をかけていた。結局十二章から最終頁までを出稿するのに平成6年から9年までを要したことになるが、しかしこの時点でプロジェクトの展望に明かりが見えてきた。

平成10年3月、私は麗澤大学を定年退職することとなり、モラロジー研究所のワシントン事務所ならびに RICE 日本語学校に赴任することとなった。このために田中駿平委員にこの委員会の副委員長に就任してもらい、プロジェクトを本部の田中、当時四国に居を移していたバントック、ワシントン DC の谷口をつないで進めることになった。当時、体調を崩して回復を期していた田中委員は、麗澤大学の教

務部長の要職にあり、加えて英語辞書の編纂事業に責任者として関わっていた。そのような状況での副委員長就任には相当の覚悟をもって臨んでいただいたことと思う。おかげで、田中副委員長の力量とリーダーシップが発揮されるに及んで、このプロジェクトは弾みをつけたように終局へむけて走りだしたのである。

各委員校正済の初校ゲラを確認して再校ゲラを準備するのが私の責任であった。再校ゲラを一方では宮島顧問が校正し、他方では二人の英国人、麗澤大学国際経済学部 P. ブランビー助教授と G. バントック氏が校閲した。この結果を田中副委員長と私が捌いて第三校が出来上がった。この三校ゲラで、今まで章の終りにまとめられていた大量の注が初めて脚注として各頁に配置されたのである。この三校を中道、中山、森、梅田、犬飼の委員が前半を、宮島顧問が後半を校正し、田中副委員長が全部を確認して出稿した。廣池幹堂理事長から学祖への思いとこの出版への期待を込めた「英語版に寄せる序」を頂戴して、平成12年の暮れには第四校が整然と姿を現わした。この四校を宮島顧問が通して校正し終えたのが、平成13年（2001）2月だった。

平成12年から13年にかけて、全委員は最後の山ともいべき索引の作成作業にとりかかっていた。索引の作成はすべて田中副委員長のリーダーシップのもとで行なわれた。委員会で次のように手順が決められた。

1. 谷口が『論文』（日本語版）新版の別巻に掲載されている「総合索引」を使用して、記載事項を決定する。その際、人名・書名は網羅し、その他の事項については谷口が選択するものとする。
2. それを各委員が担当する章の第四校ゲラに色別のマーカーで塗りつぶしていく。
3. タイピストがそれをコンピュータに入力していく。

この作業は巻数が決まり、各巻の頁が確定して始めて開始できることである。四校ではまだ各巻の通し頁数が入っていなかったので、作



業は手書きで頁数をつけるところから始まった。これは何とも膨大なエネルギーを要する作業だった。日本語版の索引は実に270頁に及ぶものであり、そこから選抜された夥しい項目をB5変形の大判で英文1,500頁から検索するというものであった。始めからコンピュータという考えもあったが、項目によっては相当の数の頁数の羅列になりかねないので、そこから選抜するよりも、日本語版の索引を活用する方をよしとする方法をすでに私が選んでいて、それを押しつける形になった。

マーカーで記載する項目を塗りつぶす作業には犬飼、川窪、田中、中道、中山、梅田の全委員が当り、一気呵成に仕上げてくれたが、これにも緻密な打合わせが必要で、コンピュータに精通した田中副委員長のリーダーシップのもとに委員が協力した結果であった。

この作業に宗中正氏が加わり、父君のお仕事の最終段階に参画してもらえたことは何よりだった。藤井大拙氏もソフト造りに貴重な力を貸してくれた。

これを完了するためには、しかし忍耐力と緻密さと時間を持ち、この煩雑な作業を使命感をもってやり遂げるコンピュータ入力者が必要だった。私は田中宏子さんの協力を懇請した。田中宏子さんは副委員長夫人だが、かつて宗委員長の込み入った校閲原稿をタイプで清書する仕事を長年手がけていた経過があり、このプロジェクトの仕上げに復帰していただきたかった。

平成12年書記に就任した田中夫人が各委員の手作業の結果をまとめあげてくれた。私としては読者・研究者にとって使い勝手がよい索引をと願って、多少の工夫を加え、田中夫人との数回のやりとりを経て成ったものが今回の索引であった。この間、田中副委員長夫妻の苦労は並大抵のものではなかった。途中で入った原稿の訂正がもとで生じた頁数のズレを発見し、夫妻で大量の頁を再点検してくれたことなどがその一例である。委員全員の協力と、副委員長夫妻の献身がなかったら、このプロジェクトはモラロジー研究所創立七十五周年の記念年

には間に合わなかったであろう。

英語版第四巻には廣池博士が言及した文献の一覧があるが、これもこの索引作成作業の成果である。加えて第十二章第7項の孔子の部に出る中国人名の漢字とピンインの対照表、および第十三章上に出る日本語の名前の漢字とローマ字の対照表があるが、これは山田玲子さんが、長年記入してきた人名カードによって作り上げたものである。

バントック氏が決めた各頁の柱（欄外の見出し）も付けられ、バントック氏と副委員長が最終的に目を通して、校了としたゲラには第六校の印が押してあった。長年にわたって一貫して丁寧仕事を進めてくれた森真理子さん（英文写植業務専門家、モリ&アソシエーツ取締役）には心から御礼を申し上げる次第である。

「論文英訳刊行作業経過一覧表」をみると、念校を出しおえた日付が平成13年6月20日。「一覧表」の最後に、山田さんが「H. 14. 3. 出版!! バンザイ!」と記している。関係者一同の気持ちを率直に代弁したものだ。

刊行された箱入り四巻のセットを見て、その美しさと品格に心打たれるのは私だけではないだろう。そこにはバントック氏の洗練された感覚が生きているし、何よりも中沢印刷㈱の誠意のこもった見事な仕事ぶりが光っている。最初原稿を出稿してから10年間、モリ&アソシエーツを支援しながら黙って進捗を見守ってくれていた中沢さんの忍耐と寛容は、中沢家の廣池博士への思いがあつてのこととは思うのだが、本当に有難いことであつた。

このプロジェクトの総務は歴代のモラロジー研究所出版部長が担当して下さっていた。これだけ長時間をかけ、関係者に負担をかけることになつたにもかかわらず、私達は余計な心配を一切せずに済んだ。必要な配慮は歴代の部長さんがすべてカバーしてくれていた。特に横山部長は刊行にかかわる実際業務一切の責任者となつて、この書を世に送り出してくれた。

皆さんの誠意の結集でこのプロジェクトがやっと完結することとな

った。その誠意にキズをつけるような点が残ってはいないかと危惧するものだが、それは最終責任者としての私の浅学非才によることで陳謝するばかりである。また二つの委員会に関わった委員の皆さんの、特に物故された方々の仕事の完結をここまで遅らせてしまったことは全く慙愧に堪えない。それもこれも、ただただご寛恕を請うばかりである。

廣池幹堂理事長、長谷川浩二現モラロジー研究所顧問、大沢俊夫現廣池学園顧問には、長い期間にわたって種々と心にかけていただいたことに衷心より厚く御礼を申し上げたい。初めての「モラルサイエンス国際会議」が終了した本年（平成14年）8月9日に、廣池理事長が「論文英訳完成慰労夕食会」を開いて下さり、関係者を招き、その労をねぎらって下さった。大変有難いことであった。

廣池博士が早くから翻訳を考え、従って世界の識者を念頭におきながら執筆を続けた『論文』の英語版が今回の国際会議で紹介され、活用されたことは、まさに画期的なことであった。ここに宿る著者の思想と魂が世界の心ある人々と対話を進めていくことを思うと、私達は本当に有難い仕事に縁をいただいたことと感謝するものである。

思えば、このプロジェクトは実質的には麗澤大学英語学科が総出でかわったプロジェクトであった。さらには、また、モラロジー研究所国際部が最も必要としていたものの一つだった。長年英語学科の主任の立場に在り、兼ねて研究所国際部長の任にあった谷口にとっては、これはどうしても仕遂げておかなければならないものであり、この点からも今日を迎え得たことを神・伝統のご加護と、深く感謝するばかりである。

終わりに、平成10年以降、ワシントン事務所で私の質問に答えてくれたジーン・モーデン先生（RICE 日本語学校講師）、また索引作りの一部を手伝ってくれたインターンの桑原亜紀子さんに謝意を表して、この報告を締め括ることとする。

（平成14年9月6日記）

## 注

- 1) 立木教夫「道徳科学の論文の英訳計画」(1995. 1. 『所報』) 参照。
- 2) この委員会は昭和60年(1985)まで続くことになるが、メンバーを総括して表示すると次のようになる。

『論文』英訳準備委員会(昭和46-60年)(1971-1985)

委員長 宗武志\*  
 委員 上田茂男\*  
       大塚善治郎\*  
       川窪啓資  
       小泉喜平  
       田中駿平  
       谷口茂  
       宮島達郎  
       森正品  
       矢野重治\*  
       割石虎雄\*  
 修正 ギャビン・バントック  
 タイプ 田中宏子  
 総務 高畑太一(1971-76)\*  
       田島政芳(1976-79)  
       生方徹夫(1979-84)

(あいうえお順、\*は平成14年の時点での物故者)

- 3) 第一翻訳担当者一覧

第一翻訳担当者一覧				
章	項	節	担当ページ	担当者
自序文(第1・2)			1-43、93-100	宗武志
警告・凜告			44-51	田中駿平
三博士序			59-91	谷口茂
第一緒言			101-115	宗武志
第二緒言			117-134	森正品
第三緒言			135-147	森正品

第1巻					
1	1-8		1-84	川窪啓資	
2	1-6		85-98	田中駿平	
3	1-7	1-4	99-188	小泉喜平	
	7	5-6	189-265	矢野重治	
	8-9		266-278	矢野重治	
4	1-11		279-470	宗武志	
5	1-7		471-504	谷口茂	
6	1-7		505-676	谷口茂	
7	1-12		677-978	宗武志	
8	1-12		979-1056	谷口茂	
9上	1-8		1057-1144	谷口茂	
9下	1-6		1145-1182	矢野重治	
10	1-28		1183-1230	矢野重治	
11	1-5		1231-1322	谷口茂	
12	1-3		1323-1330	森正晶	
	4	1-5	1331-1388	宗武志	
	5	1-10	1389-1510	大塚善次郎	
	6	1-9		1511-1630	川窪啓資
		-9		1631-1652	宗武志
	7	1-2		1653-1708	谷口茂
		3-14		1709-1784	宗武志
8-12		1785-1842	田中駿平		
13上			1843-1956	宗武志	
13中			1957-2016	宗武志	
13下			2017-2040	宗武志	
14	1-6		2041-2211	谷口茂	
	7	1-10	2212-2262	宗武志	
	8	1-12	2263-2301	大塚善治郎	

	9	1-12	2302-2388	割石虎雄
		13-19	2389-2440	宮島達郎
		20-23	2441-2470	谷口茂
	10		2471-2648	宗武志
	11		2649-2764	割石虎雄
	12-23		2765-2839	宮島達郎
	24-30		2840-2878	田中駿平
	31-32		2879-2924	上田茂男
15	1	1-5	2925-2967	小泉喜平
	2-3		2968-3018	川窪啓資
	4	1-5	3019-3038	田中駿平
	5-10		3039-3068	谷口茂
	11-24		3069-3194	矢野重治
第2巻				
1-10			3195-3342	宗武志

(頁数は旧版による)

- 4) 最後まで調べられなかった文献が一冊残った。『新版 論文』②12頁4行目に記載されている Martin の *Group Mind* という書物である (英語版では第1巻180頁の脚注)。ご存知の方にはご教示をお願いしたい。
- 5) この委員会は平成13 (2001) 年度まで続くことになるが、メンバーを総括して表示すると次のようになる。

『論文』英語版刊行委員会 (平成元-13年) (1989-2001)

委員長 谷口茂

副委員長 G. バントック (1989-94)

田中駿平 (1998-2001)

委員 犬飼孝夫

梅田徹

川窪啓資

田中駿平

中道嘉彦

中山理

森正晶

顧問	G. バントック (1995-2001)
	宮島達郎 (1999-2001)
書記	山田玲子 (1989-2001)
	田中宏子 (2000-2001)
総務	加藤明久 (1997-98)*
	横山守男 (1997-2001)

(あいうえお順、\* は平成14年の時点での物故者)